

内村鑑三著「後世への最大遺物、デンマルク国の話」岩波文庫、岩波書店 1946年10月10日刊を読む

デンマルク国の話

1. 第一に戦敗かならずしも不幸にあらざることを教えます。国は戦争に負けても亡びません。実に戦争に勝って亡びた国は歴史上けっして^{すくな} 尠くないのであります。国の興亡は戦争の勝敗によりません、その民の平素の修養によります。善き宗教、善き道徳、善き精神ありて国は戦争に負けても衰えません。否、その正反対が事実であります。牢固たる精神ありて戦敗はかえって善き刺激となりて不幸の民を興します。デンマークは実にその善き実例であります。
2. 第二は天然の無限的生産力を示します。富は大陸にもあります、^{とうしょ} 島嶼にもあります。沃野にもあります。沙漠にもあります。大陸の主かならずしも富者ではありません。小島の所有者かならずしも貧者ではありません。善くこれを開発すれば小島も能く大陸に^ま 勝さるの産を産するのであります。ゆえに国の小なるはけっして^{なげ} 歎くに足りません。これに対して国の大なるはけっして誇るに足りません。富は有利化されたるエネルギー(力)であります。しかしてエネルギーは太陽の光線にもあります。海の^{なみ} 波濤にもあります。吹く風にもあります。噴火する火山にもあります。もしこれを利用するを得ますればこれらはみなことごとく富源であります。かならずしも英国のごとく世界の陸面六分の一の持ち主となるの必要はありません。デンマークで足りります。然り、それよりも小なる国で足りります。外に^{そと} 拡がらんとするよりは^{うち} 内を開発すべきであります。
3. 第三に信仰の実力を示します。国の実力は軍隊ではありません、軍艦ではありません。はたまた金ではありません。銀ではありません、信仰であります。このことにかんしましてはマハン大佐もいまだ真理を語りません、アダム・スミス、J・S・ミルもいまだ真理を語りません。このことにかんして真理を語ったものはやはり^{ふる} 旧い『聖書』であります。

もし芥^{からしだね} 種のごとき信仰あらば、この山に移りてここよりかしこに移れと命うとも、かならず移らん、また汝らに^{あた} 能わざることなかるべし

とイエスはいいたまいました(マタイ伝十七章二〇節)。また

おおよそ神によりて生まるる者は世に勝つ、われらをして世に勝たしむるものはわれらの信なり

と聖ヨハネはいいました(ヨハネ第一書五章四節)。世に勝つ^{すき} の力、地を征服する力はやはり信仰であります。ユグノー党の信仰はその一人をもって^{すき} 鋤と^{もみのき} 樅樹とをもってデンマーク国を救いました。よしまたダルガス一人に信仰がありましてデンマーク人全体に信仰がありませんでしたならば、彼の事業も無効に終わったのであります。この人あり、この民あり、フランスより

輸入されたる自由信仰あり、デンマーク自生の自由信仰ありて、この偉業が成ったのであります。宗教、信仰、経済に関係なしと唱^{とな}うる者は誰でありますか。宗教は詩人と愚人とに佳^よくして實際家と智者に要なしなどと唱^{とな}うる人は、歴史も哲学も経済も何にも知らない人であります。国にもしかかる「愚かなる智者」のみありて、ダルガスのごとき「智^{さと}き愚人」がありませんならば、不幸一步を誤りて戦敗の非運に遭いまするならば、その国はそのときたちまちにして亡びてしまうのであります。国家の大危険にして信仰を嘲^{あざわら}り、これを無用視するがごときことはありません。私が今日ここにお話しいたしましたデンマークとダルガスとにかんする事柄は大いに軽佻浮薄^{けいちようふはく}の經世家^{いまし}を警^{いまし}むべきであります。

P86 ~ 88

[コメント]

敗戦必ずしも不幸にあらず。国は戦争に負けても亡びない。こんな力強いメッセージはない。内村先生からもっともっと学ぼう。古典からもっともっと学ぼう。

- 2011年7月20日林 明夫記 -